

「言語共同体」はどこにあるのか

福 谷 茂

丹治氏（以下では敬称を略させていただく）の思索の「中間決算」である本書は、その背後に膨大な読書と厳密な思考を秘めているものでありながら、あくまでも平明明晰に、「台所のことば」（とまではゆかないが……）で哲学を語ろうという強固な方法的意識によって貫かれている。丹治は妄りに訓辞を垂れるような人物ではないが、私にはここまで徹底された姿勢はやはり倫理性を自ずから帯びてくるように感じられる。本書を読んでいる間、いくどとなく、問題を可能な限り分かり易く表現しようという執念、また分かり易く表現できるところまで煮詰めて行こうという思考の粘り強さと（普通それとは両立しがたいものであるが、本書においては支配的なトーンである）明朗性に、常日頃お会いしている著者の真面目を改めて見る思いがした。その誘いにのって、率直に感想を述べることにしたい。あさっての方を向いたものとなろうが、それは著者が正して下さることであろう。

本書における著者の眼目を示す言葉は、表題にも現れている「ダイナミズム」であると思われる。力動的なもの、運動、動き、変化を捉えるということとは、それらの完全な否定と同様に、古来哲学者の夢であった。哲学史においてしばしばこれらのものを捉え得ていないということが或る哲学者の他の哲学者に対する批判点をなしてきたことは周知の通りである。特に哲学に進化論的発想が内在化されてからは、向上進展という意味での変化を根本範疇化した哲学も現れてきている。しかし、ダイナミズムを自明のこととして前提してしまうのではなく、概念的に内容を持たせて構成するという事は容易なことではない。ダイナミックなものは本来哲学の手を擦り抜けてしまうのである。著者はウイトゲンシュタインの言語観を静的なものと批判することを出発点にして、クワインに学びつつ、言語におけるダイナミズムという考えに哲学的内容を与えようとしている。ただし、この「ダイナミズム」は、哲学研究者が読み込みがちな飛躍とか躍動とかいう意味を孕んだことではなく、むしろその反対、つまり「準－同一性」を保ちつつ、しかも「非－推移律的」にあるものとしての言語の（言わば着実な）あり方、「働き方」を表現する言葉である。著者の強調する「補償の原理」も、このような着実なダ

イナミズムという印象を強化するものである。とにかく哲学は限界状況ばかりに注目しがちであるが、著者はあくまでも平常心を失わない。そしてこのようなごく自然な、醒めた言語観を哲学的に定礎するという困難で忍耐力を必要とする作業が著者によって成し遂げられたというところに、本書が日本の分析哲学研究でもつ意義が存するものと思われる。

ロマン主義哲学の退場のあと、言語に一樓の望みを託するかのような解釈学的哲学における救世主的な役割とは違って、ここでは言語はあくまで自然主義的に当たり前の存在として扱われている（307ページ、注2を参照）。本書のテーマが「言語哲学」であることは自認されているが、言語は決して特権的な地位を与えられてはいない。というよりむしろ、言語そのものは著者の関心事ではなく、まして著者を魅惑しているわけではないという印象を受ける。正確に言えば、本書の狙いは「認識の進展というダイナミックなプロセスにおける言語の働き」（「序」）という問題であり、ダイナミックに進展するのは「認識」のほうであって、言語はそれを受け入れ、対応するためにはどのようなあり方をしていなければならないのか、という着眼点から、それ自体に「ダイナミズム」つまり、準一同一性を守りつつ、非一推移律的にあるという「働き方」を承認する必要性が主張されているように見える。本書のタイトルから認識の発展のダイナミズム自体に、言語がその固有の本質において貢献しているとか、あるいは両者が交互関係においてあるとかいうような当て込みをすれば、それは誤解と言うことになるだろう。もちろんこのような素朴な「言語」と「認識」との二元論がとられているわけではないのであろうが、両者の間にはかといって（門外漢が期待するような）緊張関係もないように感じられるのである。（「言語の変化」か「認識の進展」か、という問題意識に象徴されている。323ページ参照）本書を通じて、「認識」と「言語」とが自由に行き来でき、入れ替えられる透明な関係に置かれているように思われるが、そうしてよいこと自体はテーマ化されて論じられてはいない。これは著者の関心がそこにはないということを物語るものであろう。この「言語哲学」はもはや「革命」時代の言語哲学ではない。

ウイトゲンシュタインでもクワインでも、言語と世界との間には先ず鋭い断絶があつて、だからこそ、両者がいかに関わるか、関わらせるかという問題意識が成立したのであろうが、丹治にはそれはない。むしろそのような原初的な問題意識がすでに背後の一里塚となってしまった地点にこそ丹治は立っているのであろう。これを承認した上で、著者の主要論点である「補償の原理」について私の理解と批判を示すことにしたい。

この原理は、先ず209ページで定式化され、更に265ページで拡大版が提出されているが、その目的とするところは、どのような要請を守れば、言語の同一性の基準として予め確定されている「対話の円滑さ」を損なわずに、しかも言語が「円滑な沈黙」(207ページ)に陥らずに改訂を受け入れられるか、つまり「準-同一性」を確保できるか、ということに対する答えである。今焦点要点を絞って捉えるならば、それは、なにか言語共同体の共有信念との無視できない不一致のある話をしようとするものは、それによって生ずる対話の円滑さの低下を補償するのに十分な論証・説明を、共通の言語的なふるまいのパターンの残りの部分に合致する形で与えることができねばならない(209ページにもとづく)というものである。ここで興味を引くのは、無視できない不一致のある話をしようとする者が、あたかも「言語共同体」の外側にいて、外から内に、無視できない不一致のある話を持ち込むというような意味に受け取れる表現がとられていることである。しかし、この者も外に十分な論証・説明を補償として提出しなければならない以上、そのまえに自分自身ではすでに十分な論証・説明を行なっているはずである。つまり、その無視できない不一致のある話は、すでにこの段階で言語共同体には受け入れられたもの、少なくとも受け入れられる可能性のあるものとなっているのである。「円滑な対話」という基準は先ずこの段階で行なわれているのではないか。「言語共同体」は先ず我々のうちに存在するのではないか。我々の思考といえども、それが表現されることを念頭に置いているなら、まして科学的な概念を駆使して行なわれるものであるなら、すでにその遂行の時点に於て出来るだけ別のアングルからの検討を含み込んでいて、それによって「円滑な対話」に必要な論証と説明を予め伴ってくるのではないだろうか。もしそうであるとする、と、「言語共同体」をいう意義はどこにあるのだろうか。外にあるものとしての言語共同体の本質は、科学理論というような形での命題の体系という、言わば理念的(完全な形で誰かの頭のなかにあることを必要とはしないという意味で)な存在なのだろうか。科学理論が改訂を受け入れうるものであり、しかもそれは安定性を保っているというのが著者の問題であるが、理論というものを極めてリジッドに捉えることに由来した、「補償」の必要性なのではないだろうか。

拡大版の「補償の原理」は、「観察文の刺激意味」についての不一致が、十分な論証と・説明を伴った上で「言語集団」にその言語の準-同一性を保つべく導入される話が遵守すべき要請に付け加わった点が拡大されている。要点は、著者が観察文にも「信念・理論負荷性」を承認するということであ

る。これによって、準一同一性と「円滑な対話」とを、観察文にいたるまで、つまり、「円滑な対話」に対する最大の脅威にまで押し広げることができるようになるわけである。これは、「言語集団」の最終的勝利を意味するのだろうか。私の疑問は、なぜそれほど言語集団が護持されねばならないのかということである。言語集団という思想を支える重要なものが科学理論であるとするならば、この科学理論は何か「守り」の姿勢に立つものであるような印象をつい受けてしまうのである。私にとっては、科学理論とはポパーの描き出したような、「反証可能性」という概念によって象徴される、極めて攻撃的なものとしてとられるのである。科学理論は、自己の反証に向けての活動であり、反証可能な命題を先ず提出しなければならないというのがポパーの科学論であるとするならば、ここから導き出される言語観は、外から内へではなく、内から外へというものとなるであろう。「体系の把握による理解」「像を描くことによる理解」という論点を核にした著者の言語観が、ダイナミックな安定を強調することはよく理解されるが、言語には外からの脅威に対処するだけでなく、自ら「円滑な対話」を破壊することをこそ目指すという面はないのであろうか。分析哲学の主流での言語観は、やや人工的な状況でのものであるようにも見えるのである。

以上、四〇〇〇字という予め与えられた制限を守ったため私にとっての素朴な疑問を記しただけにとどまらざるを得なかった。